

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名

論 文 題 目

論文審査担当者

主 査

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、世界は間主観的に構成されるとする関係論的アプローチに基づき、体育学習の学習内容と単元構成原理を理論的に明らかにするとともに、具体的な学びのデザインを提案し、検証することを通して、体育学習の再検討を行うものである。関係論的な体育学習の検討は、1990年代から、いわゆる「楽しい体育」論者らによって理論的・認識論的パラダイムの転換を射程に入れつつ、「プレイ（遊び）」や「学習（学び）」の概念自体の問い直しを迫ることで「楽しい体育」論の脱構築として始まったが、具体的な授業計画や授業実践には至っていないのが現状である。本論文は、単に理念的考察にとどまらず、授業実践の中で、より具体的な体育学習の内容や方法を提案することによって、今後の体育学習の在り方に大きく貢献することが期待できる。

論文は8章から構成されている。

第1章では、現在の体育学習の抱える問題に対し、方法論レベルにとどまらずパラダイムレベルからの検討を進めていくために、「関係論的アプローチ」の定義を行っている。哲学、社会学、教育学の立場から整理を行った結果、パラダイムには、第一次的にモノ（客観）が既に在り、それらが二次的に関係し、世界が構成されると考える「実体主義／実体論的な認識様式」と、世界は一次的に主観の関係の中から作りだされた共同主観的（間主観的）に構成されるととらえる「関係主義／関係論的な認識様式」の2つがあり、関係論的アプローチとは後者のパラダイムに立脚するものであると述べている。そして、公立小学校の校内研究主題の調査から、**関係論的アプローチによる学習への取組**は、学校教育現場において出現し始めているものの、学習論と発達観のねじれが見られ、**実質的な学習の転換に至っていない**という問題を指摘し、問題設定の意義をまとめている。

第2章では、学校教育における関係論的アプローチの研究動向を、その背景にある文化・歴史学派（ヴィコツキー学派）の社会的構成主義を概観しながら検討し、日本における学び論の展開過程を概観している。そのうえで、国内外の体育学習における関係論的アプローチの研究動向から、青木眞の「関係論」、松田恵示の「かかわり論」、細江文利の「関わり合い学習」が、理論的・認識論的パラダイムの転換を射程に入れながら、また、「プレイ（遊び）」や「学習」概念自体の問い直しに迫りながら、「楽しい体育」を脱構築し、関係論的パラダイムに立脚した体育学習を目指していることを指摘している。しかしながら、理論的な単元構成や具体的な学びのデザインの手順については提出されていないことから、本論文の目的として、**学習者の意味志向に着目した学習内容の解明（研究課題1）と学びとプレイ（遊び）の意味世界の再解釈（研**

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

究課題 2) を行い、関係論的な体育学習の単元構成試案 (研究課題 3) と単元構成原理 (研究課題 4), 及び体育における対話的学びのデザインと実践を提出 (研究課題 5) する 5 つの研究課題を設定している第 3 章 (研究課題 1) では、小学校の教育実践と体育授業実践を通して学習内容を明らかにしている。まず、「学習者の意味志向」に着目し、学習者の意味規準に基づき「共感志向による意味」を重視した学習内容を提起している。また、学習内容を先験的に知識や技術などを実体化する従来の「学ぶべきモノ」ではなく、状況と文脈に応じて常に変化していくという、他者 (人) や学習財 (モノ・コト・自然など) とのかかわりのある多様な活動を通して意味を生成していく社会的行為、すなわち「学んでいるコト」ととらえることによって、「学習者の意味生成」を促す必要があると論じている。

第 4 章 (研究課題 2) では、大学での教育実践を通して、関係論的な体育学習における学びとプレイ (遊び) の意味世界の再解釈を行っている。その結果、**学びの意味世界**は、主客分化に関する軸と主体的関与軸の 2 軸から成り立ち、〈まじわり (参入)〉— 〈なぞり (模倣)〉— 〈かたどり (構成)〉— 〈かたり (表現)〉の 4 つの意味が相互作用し円環することで、学びの世界が構成されると論じている。また、**プレイの意味世界**は、同様の主客分化と主体的関与の 2 軸から成り立ち、〈ひたり (眩暈)〉— 〈なりきり (模擬)〉— 〈こころみ (競争)〉— 〈まかせ (運)〉の 4 つの企投の意味が相互作用し円環することで、プレイの世界が構成されると論じている。そしてこれらが「**かかわり合い**」を基軸とする**体育授業の中核**をなすものであるとしている。

第 5 章 (研究課題 3) では、小学校体育科授業実践 (マット遊び) を通して、「意味世界の再構成としての学習」という体育学習を理解するための単元構成に関する試案を提出している。そして、関係論的な体育学習の単元構成の要点を以下の 3 点にまとめている。①単元の内容構成は、「文化の中心的活动」から構成し、**取り上げようとする運動の中心のおもしろさ**を明確にすること、②単元の展開構成は、**文化の周辺的な活動**から構成し、4 つの意味 (〈まじわり・ひたり〉・〈なぞり・なりきり〉・〈かたどり・こころみ〉・〈かたり・まかせ) をたちあげるための工夫を行うこと、③学習過程は、「意志—脱・意志」と「分化—未分化」の 2 軸が交差し、「運動の中心のおもしろさ」をとりまく 4 つの意味世界を一回りするところからなる**円環モデル**に基づくこととしている。

第 6 章 (研究課題 4) では、小学校体育科授業実践 (跳び箱運動) を通して、単元

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

構成原理を提出している。単元の**内容構成**は「プレイ（遊び）」概念と結びつき、従来の客観主義的知識観から社会構成主義的知識観への転回が必要で、「運動の目的・内容論」から脱却し、**プレイを社会的・文化的プロセス**ととらえることが重要であるとしている。また、単元の**展開構成**は「学習」概念と結びつき、従来の所与の知識や技能の個人的獲得という見方から、**他者とのかかわりのある多様な活動を通して意味を構成していく社会的行為としてとらえていくべき**であるとしている。

第7章（研究課題5）では、研究課題1から研究課題4までの体育における単元構成に関する基礎的考察を踏まえ、具体的な体育授業デザイン手順について明らかにしている。ここでは佐藤学が提示する「対話的学びの三位一体論」に基づきながら、「体育における対話的学び」の以下の3つの次元について解明し、それを踏まえた学びのデザインの手順を提出している。それは第1に「**主題づくり（何か・概念）**」として**運動の中心のおもしろさを設定**すること、第2に「**内容づくり（何を・目的）**」として**わざ（身体技法）を設定**すること、第3に「**課題づくり（どのように・方法）**」として**共有の学びとジャンプの学びを設定**することであると述べている。この授業デザインを、二つの小学校体育科授業実践（小型ハードル走、短距離走・リレー）で行っている。その結果、安定している状態に運動の中心のおもしろさを基軸とした難易度の高い条件を付加した課題を提示することで不安定な環境がつくりだされ、学び手はその中で異質な他者（仲間）や教師からの援助を受けながら試行錯誤を繰り返し、やがては大きなゆらぎをきっかけにそれまでの運動を壊し、新しい運動を構築するというプロセスをたどること（「**協同的学び（collaborative learning）における発達過程**」）を明らかにしている。また、運動の中心のおもしろさに迫るためには、該当学年の教育内容を基盤としながらも、その範囲は該当学年を超えるところに設定し、その領域（範囲）の中に学びをデザインすること（「**真正な学び（authentic learning）におけるわざの形成過程**」）が重要であることを明らかにしている。

第8章は、本論文の要約を行い総括としている。

本論文の意義は以下のようにまとめられる。

- 1) 関係論的アプローチによって、従来の体育授業における「できること」の偏重から、「動くことの意味」を見出し、今後の体育授業の在り方を提案した先駆的

別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

な研究であること。

- 2) 多くの授業実践に基づき、体育学習における学習内容、単元構成原理から具体的な授業デザインまで提示し、関係論的な体育授業構築のための理論と方法を明らかにしたこと。
- 3) 学習内容としては、単に知識や技能の獲得ではなく、その過程で生じる社会的相互作用そのものが重要であることを明らかにしたこと。
- 4) 学習における単元構成としては、運動の中心なおもしろさを社会的・文化的に位置づけ、それを取り巻く運動の意味がたち現れる工夫をすることを実証したこと。
- 5) 具体的な授業デザインとして、運動の中心なおもしろさを設定し、そこでのわざの形成過程に着目することによって、共有の学びとジャンプの学びの双方を達成させることが重要であることを実践例によって示したこと。

論文審査担当者からは以下のような指摘がなされた。

- 1) 小学生を対象とした実践例がほとんどであるが、発達段階による違いがあるのであれば、論文題目を「小学生」と限定した方がいいのではないか。
- 2) 先行研究では理論的研究しかないというが、海外も含め実証的研究はないのか。
- 3) 学習者のパーソナリティや性格特性、能力等の個人差はどう扱うのか。
- 4) 学習者の変化は、授業内容に対する新規性によるものではないのか。対照群を設けるなど、客観的な指標で評価することが必要なのではないのか。
- 5) 第 6 章までは技術的要素が少ない学習内容であるが、第 7 章では技術が重要な課題となっている。第 7 章の論文全体の中での位置づけが明確でない。
- 6) 関係論的アプローチの中で、体育学習における技術・技能をどうとらえるのか。
- 7) 共同で学ぶことの意義は何か。その意義をどう立証できるのか。

こうした質問や感想に対し、学位申請者からはおおむね適切な回答が述べられ、研究方法の問題点も十分に理解し、今後の研究課題と結び付けていく旨述べられた。

以上の口述試験の結果、本論文は体育学習を関係論的アプローチから理論的に再検討し、多くの授業実践を通して地道に検討してきたもので、今後の体育学習に対して重要な知見をもたらしている。それ故、審査員一同は、一致して本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文審査の結果を「可」と判定した。